

井口孝親先生の思い出

九州大学における《社会学》のあけぼの

大塚幸男

わたくしは昭和五年四月、九州帝国大学法文学部に入学して、仏文学を専攻した者である。法文学というのは、法学や経済学の専攻生も必ず文学関係の講義をいくつか聴かねばならず、また、文学の専攻生も必ず法学や経済学関係の講義をいくつか聴かねばならないとしたもので、この制度は時代にさきがけた劃期的な試みであったといえる。こうして若き日に、広い学問的視野を与えられたことをわたくしは今にしてありがたく思わずにはいられない。

それはさておき、入学の第一年に、わたくしは井口孝親教授の「社会学概論」という講義題目を見いだした。井口先生はその数年前に出た『ローザ・ルクセンブルクの手紙』の訳者として知られ、わたくしもこの本に感激していたので、さっそく先生の講義を聴くことにしたのである。

その頃は出版物の数は今日ほど多くはなかった。しかし、その数少ない出版物の多くは立派な本であったので、それだけ青年の

上に及ぼす感化も深く大きかった。そして、あえていえば、大学に学ぶ若者はみんなエリートだったのである。(現代の大衆社会の大学および大学生と比較せよ。そしてそれに対応した現代の出版物の氾濫ぶりを考えて見よ。)井口先生のローザの手紙はいくたびか版を重ね、かなり後までも読まれたようである。その後、カウツキー夫人編の、より完全な書簡集が、川口浩、松井圭子両氏の共訳で岩波文庫から出たが、これは井口先生訳のそれほどには評判にはならなかったし、与えた影響もさほどではなかったと考えられる。井口先生の訳本にはたくさんの人々の序文がついていた。それらの人々の名前のうち、いま、わたくしの記憶にあるのは吉野作造の名である。長谷川如是閑の名もあったかと思う。この訳書には獄中のローザが草や花に寄せた美しい詩的な手紙がとりわけ選ばれていた。熱烈な革命の闘士、『資本蓄積論』の著者である彼女の心の、このやさしさ、訳者の井口先生もまた、詩人肌のやさしい心の持主であったにちがいない。そう感じて、わ

たくしたちは先生へ敬愛の念をささげたのであつた。——（革命の女戦士にして、ローザに似たやさしい心の持主には、バリ。コミューヌの闘士ルイーヌ。ミンシェルがあり、わが国では野村望東尼（とくに、その『姫島日記』を見よ）がある。

さて、井口先生の講義は『社会学概論』と題されていたものの、「社会学は学として成立し得るか？」という問題に終始した。わたくしはすでに大阪外国語学校時代に「社会学」の講義を聴いていた。先生は清水なにかしといひ、文部省の視学官から赴任して来た方で、その講義はフイアカントの形式社会学を祖述したものであつた。しかるに井口先生は、社会学成立の根本問題を詳しく論ぜられたのである。コントヤ、デュルケムの名ももちろん出たにちがいないが、とりわけ先生がしばしば引用されたのは、グンブロウィッチ Gumpłowicz であつた。念のために、『岩波西洋人名辞典』の記すところを写してみれば、

Ludwig Gumpłowicz, 1838. 3. 9—1909. 8. 19.

オーストリア（ポーランド生れ）の政治学者、社会学者。クラカウに生る。グラーツ大学教授（1897—1909）。社会の発展は、民族、国家、種々な社会集団の闘争により生ずると説き、国家およびその法制を実証的、社会学的に究明しようとした。彼の業績はラッツェンホフアー、スモール、オッペンハイマーにより受け継がれた。癌を病みグラーツで自殺した。

井口先生が社会学成立の根本問題に多くの時間をあてられたのは、その時分にはまだ社会学成立の不可能が問われていたからであらう。ところで今日の日本では、戦後、アメリカの影響の下に、社会学者は種々のアンケート（いわゆる社会調査）をもてあそんで事足れりとしている嫌いがないであろうか？あえて、もてあそぶといったのは、単なるアンケートだけならば、ひとり社会学だけによつてではなく、他のあらゆる学問領域においても行なわれているし、行なわれ得るのではないか。社会学の調査というならば、それは社会学固有の方法と観点とからなされるのでなければなるまい。今日の日本の社会学者の多くには、果たしてそうした用意があるや否や？門外漢の言としてお許しただきたいが、一例を挙げてわたくしの疑問を提出した次第である。聞くところによると、社会学はブルジョワ的学問として、ソ連では永らくとんじられていたが、少し前からソ連のマルキシストたちによつても取り入れられている由であり、その方面の本も出ている（例えば、紀伊国屋新書、石川晃弘、『マルクス主義社会学』）。このへんで、もう一度、社会学成立の可能性について——いや、社会学固有の領域と研究方法とについて、理論的に考え直してみる必要がないであろうか。

わたくしは社会学専攻のある学友（この友人が社会学のただ一人の専攻生であつた）と一緒に、西公園下の荒戸町に井口先生を訪ねたことがある。小さな借家であつた。先生は八畳ほどの部屋

の壁ぎわに置かれたベットのの上に身を横たえたまま、わたくしたちに応対された。講義を終えて帰ると、二、三時間もじっと寝て、疲れを癒さなければならぬとのことであつた。そういえば、教室でも椅子に掛けたきりで、片手だけを伸ばして板書されるので、先生の頭の背後に半円形を描いて、それらの板書はひろがるのであつた。――すでに致命的な病が進行していたのであろう。先生は九大に御赴任以前に、スイスのサナトリウムで療養されていたとのこと。そしてその病氣は結核と信じられていたが。――事実スイス時代はそうだったかも知れないが。――実は癌であつた。九大病院に入院された時には、全身にひろがっていた由である。グンブロヴィチの生命を奪つたのと同じあの癌が。。。。

ベットの上方の壁には奥さんとお嬢さんとの写真が掛けられていた。奥さんはドイツ人で、お子さんとともに、ドイツにとどまっていたらしい、先生は毎月、送金していられると聞いた。そういえば、先生の左手のくすり指には、エンゲージ・リングらしい金の指環がいつも光っていたものである。

ところで先生のそばに待って、身のまわりの世話をしていたのは、三十歳ばかりの女の人であつた。驚くほど色が白く、病的なばかりにまよなよとした方であつた。そして部屋には一匹の白い猫が寝そべっていた。それは谷崎潤一郎の世界を思わせるような、一種、妖しい雰囲気であつた。今も、あの日の訪問のことは眼前に秀麗する。……

先生の死後、助手であつた清水盛光さんの尽力で、遺稿『自殺の社会学的研究』が刊行された。その冒頭には、一八一一年十一月二十一日、ポツダム近郊ヴァン湖畔において、若い人妻のヘンリエッテ・フォーゲルと情死を遂げた詩人クライストのことが記されている。当時、清死（心中）は日本独得の義理人情の産物であると主張していた高田保馬博士に反対して、井口先生は心中が必ずしも日本だけのものではないことをいおうとして、まず初めにクライストの例を引かれたのである。（いうまでもなく、高田博士は経済学者たる以前には社会学者であつたので、『社会学原論』の大著がある。この書は今日においても価値を失わぬものであるとされ、昨年、岩波書店から覆刻刊行せられた。）

時は流れた。七、八年前、京都の伏見区深草西伊達町なる深草住宅というアパートに友人の林憲一郎さん（京都大学教授）を訪ねた日、たまたま林さんの隣人が清水盛光さんであることを知った。しかし、折あしく清水さんは留守で、奥さんに会って久闊を叙すことができただけであつた。清水さんが京都大学教授で、中国農村の研究の第一人者であることは人の知るところである。奥さんもわたくしたちの同窓の人である。

数か月前、嘉治隆一氏の「明治・大正の五大記者」（朝日新聞社刊）を読んでいたら、図らずも井口孝親先生のことが出ていて、限りなくなつかしかった。長谷川如是閑、鳥井素川、花田比露思、等々があの筆禍事件で朝日を連袂辞職した時、ただ一人の平記者

として退社を共にしたのが井口先生だったとあったのである。そして、井口先生をして社会学の道に入らしめたのは如是閑であつ

たという。

(一九七三年八月八日稿)

井口孝親さんと令夫人のことども

新 明 正 道

井口さんは、こちらの社会学科の初代の主任教授であるが、私はそのお名前を、私が東大法学部在学中(大正七—一〇年)、当時一部の学生の間で読まれていた雑誌「大学評論」を通じてすでに知っていた。この雑誌は後に衆議院議員にもなった星島二郎氏を金主として発行されていたように記憶しているが、私が師事していた吉野作造先生もこれに応援して時々論文を書かれていたところから、先生とも若干縁のあった初期の新人会の会員になっていた私は、「大学評論」を買って読むと同時に、これの寄稿者の一人だった井口さんご自身また吉野先生の門を出ておられるというので、何とはなしに氏に特別な親近感をいだかされていた次第である。

ところで私は大正十年大学を卒業してすぐ、当時神戸にあった

関西学院で教鞭をとり、政治学とあわせて社会学の講義まで担当することになったが、大学で社会学について、研究する機会が全くなかった私は、社会学の講義の準備に全力を傾注する必要がある、さかんに社会学書を読みあさって、論文も主にこの領域を中心として発表しているうちに、何時の間にか世間から政治学よりも社会学を研究する人間とみなされるようになり、結局、昭和元年東北大学法文学部に社会学の講義が開設されるとともに、図らずもその担当者として招聘されることにもなった。

この間井口さんは、私よりも一足早く、九州大学に法文学部が出来るとすぐ、大正十四年に社会学の講義を担任され、間もなくドイツに留学されていたようで、私も時折論文をのせてもらっていた。長谷川万次郎さんの主宰する雑誌「我等」の誌上で、私は